
アッシュのクリスマス

莉名 晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アッシュのクリスマス

【Nコード】

N0130J

【作者名】

莉名 晶

【あらすじ】

泣く子も黙る六神将のアッシュ。

彼はデリストが偶然発見した異世界へのトンネルをくぐって

12月24日の日本に降り立った。そこで一人の少年と出会う

#1（前書き）

え〜〜キャラは崩壊すると思います。

主観が入るのが苦手な方はご遠慮ください

1

燃える焰のような赤い長髪、翠色の鋭い眼光
泣く子も黙らす彼の名は、

ここローレイ教団神託の盾騎士団で
鮮血のアッシュと呼ばれていた。

今アッシュは教団内の暗く長い廊下をいつもにも増して
いらいらせかせかと歩いていた。

その眉間に刻まれた皺がより一層深く刻まれ、誰が見ても
機嫌が悪いとわかる。

触らぬ神にたたりなし・・

誰もが彼に近づくことをためらった。

彼のイライラの原因は、ついさっきリグレットに呼び出されて、
頼まれた用事の内容に起因する。

「アッシュ・・忙しいところを済まない、実は折り入って頼みが
ある

これを見てくれ」

火急の依頼があるという知らせに、とりあえず、すべての予定を、
キャンセルしてリグレットのもとに駆けつけたアッシュは

彼女から一枚の紙切れを渡されしほし絶句したが、あまりに真剣な
口調に気を取り直し、重い口を開いた。

「これがどうした、見たところただのケーキの見本にみえるが・
・・」

アッシュが手渡されたものは、色とりどりの果物が乗っていたり、
チョコレート

だの生クリームなどで、ごてごてと飾り付けられたケーキの写真が
所せましと並んで掲載されているパンフレットだった。

「確かにそうなんだか、もつとよく見てほしい、」

リグレットに促され、アッシュはその紙切れを細かく観察した。

「これは、何だ？見たこともない文字のようなものが記載されているが？」

紙切れに写真とともに載っている線の組み合わせに、違和感を感じたアッシュは

すぐさまそれを口にした。

「さすがだな・それを文字だと思うものは少ない・・・実はそれは

異世界よりこの世界に紛れ込んできたものなのだ」

「何だと」

「実はディストが、フォミクリー装置のさらなる安定を図るためにいろいろと実験をしていたのだが、その過程で、異世界につながる道をみつけてな。これはそこから流れてきた。

そこは、我々の世界とあまり変わらない人々が暮らす地らしい。

ヴァン総長がその地の調査をせよと言われてな・・・」

「俺への依頼なら断る 誰かほかの者に頼むんだな」

ただでさえ忙しい身、そんなわけのわからん調査には付き合えないと

ばかりに、アッシュはリグレットの顔を半分に見ながら、そういった。

「いやそうも言っていてられないのだ。異界へつながる道は小さくそれを人が通れるまでにするにはおまえの超振動が必要らしい

お前にしかできないのだ、アッシュ」

お前にしか出来ないと言われれば、従うしかない

アッシュはしぶしぶ承知した。

「そこでだ・・・あつとそのなんだ・・・」

リグレットは先程の重い口調とはうって変わり、何処か恥じらうような

そぶりを見せて、肝心の要件はいつまでも言わないまま何となく

もじもじとしていた。

「えつとだな・・・その・・・かの地にいったらこちらに戻るときにそのケーキを持って帰ってきてほしいのだ・・・」

意を決したように言うリグレットの真意がよくわからずアッシュは黙ったまま彼女を見つめた。

「デイストの翻訳によるとその紙切れを店に持っていけば、そこに書いてある

ケーキがいくつか貰えるらしい。」

「言葉が通じるのか?・・・」

アッシュはリグレットに当然の質問をした。

「いや・・・そこはなんとか・・・なっ・・・頼む特務師団長殿」

変な態度のリグレットに気おされて、アッシュはその厄介事を請け負った。

部屋を退出すると、扉の前に自分を待ち構えていたようなそぶりのアリエッタがいた。

彼女もまた、何か言いたげにもじもじとしていたが、おもむろにアッシュの手を

とるとその中に小さな宝石を落とし握り込ませた。

「なんだこれは・・・」

「アリエッタの宝物・・・アッシュにあげるです・・・だからケーキを分けてくだ・・・さいです」

彼女はそういうと、アッシュの返事も待たず、パタパタと走り去っていった。

「全くなんなんだ? まあ女子供は甘いものが好きだからな。」

アッシュはアリエッタが無理やり置いて行った宝石を手のひらで転がしながら、

口の端に苦い笑みを浮かべて、そう呟いた。

とそこに、突然大きな壁のような大男がぬつとあらわれ、アッシュの顔に

影を落としたかと思うと、その男は静かな声でアッシュに話しかけてきた。

「おい・・・まさかあんたもケーキが欲しいというのではないだろうなラルゴ・・・」

アッシュは、ラルゴの話を途中で遮ってそういった。

「うむまあそんなところだ。話が早く済んで良かった。では頼むぞ」

彼は照れくさそうに、頬を人差し指で掻きながら足早に立ち去った。

「ふふっふ・・・あんたのそのいぶかしげな顔全く笑えるね・・・」
後ろを振り返ると、仮面の下は癖のある笑い顔だろうとすぐに予測のつく

シンクがいつの間にか立っていた。

「お前はこのバカ騒ぎのわけを知っているのか？」

アッシュは今にも大声を出しそうな勢いで、壁に寄り掛かってこちらを

小馬鹿にしたように見ているシンクに声をかける。

「ん・・・知りたきやデリストにでも聴くんだね。どうせそこに行くんだからさ

早く行ったらどうだい、みなさんケーキをおまちなだよ・・・ふふふ」

これ以上シンクの顔を見ていると、聞きたくもないいやみを腹いっぱい

聞かされるだろうと思ったアッシュは彼を無視して、デリストのもとへ

急いだ。

「待っていましたよアッシュ・・・あなたが任務でここを離れてい

るうちに大変な
発見がありましたね・・・リグレットから話は聞いていると思い

ますが、」

デイストの研究室へ行くと、待ちかねたとばかりに、椅子に乗った男が

椅子ごと近づいてきた。

「話も何も・・・異世界へ行けとしか聴いていない。揃いも揃って、

皆でケーキなんぞを欲しがるのはなぜだ」

アッシュは、胸の内にもややもやしている疑問をデイストにぶつけた。

其れを聞くと彼は、ものすごいテンションになり、両手を広げて、中空を見つめ

べらべらとまくし立てはじめアッシュをうんざりさせた。

「ケーキ・・・ケーキ・・・ケーキ・・・それが最も大事なのです。

私の調べでは

かの地では12月24日の日・・・こちらでは、ルナリデーカン・イフリート・24の日

に当たるのですが、その日に自分の大事な人間とケーキを食べる風習があるのです。

そのケーキを食べた者同士は、どんなに喧嘩をしても和解し、片思いの

ものは恋が成就し、すべてのものがしあわせをつかむことができるというのです。

これを・・・これを・・・ジエイドに・・・」

「ばかばかしい・・・そんなことの為に呼び出したのか・・・」

「

「よいではないですか・・・アリエッタが泣きますよ・・・とにかく異世界行きは

ヴァンの意向でもあります・・・その紙切れが引き換え券らしいですから、

とっとうって貰ってくればいいのです。」

デリストはさっきとはうって変わって、声のテンションを落とす神経質そうに

そういった。

「バラの植わっている花壇横に装置を設置しましたから、そこにすぐ来るのです。」

ああ、異世界では、剣を持つのは違法だそうですから、剣は置いておくように・・・」

彼はそういうと、アッシュの返事も待たずに椅子ごと窓から出て行った。

「全くふざけていやがる・・・いくら異世界といえどもそんな都合の良いものが

あるものか・・・ケーキなんぞで幸せになるなど・・・」

アッシュは教団の長い廊下をせかせかイライラしながらバラ庭園に急ぎ

そこにつくと、一人一人がやっと通れるような小さな円形の枠が浮かんでいるのを見た。

「くだらん任務は早急に終わらすに限るな・・・」

彼は、そう言ってその門の前で、超振動を放った。

その光は虚空に向かって消えてゆき後ろに突き抜ける事はなかった。

そうして彼は急速に広がっていくその門をくぐり異世界への道を急いだ。

#2

ダアトの庭園からゲートをくぐり、

第七音素の流れに身を任せて、長いような短いような、不思議なトンネルを

漂っていった先に、仄明るい光の点が見えた。

明るさに目を慣れさせる余裕もなく、あっという間に中空へ投げ出される感覚がして、

アッシュは、一瞬のうちに、自分の置かれている状況を判断すると、

鍛え抜かれたしなやかな筋肉を使って、近くの木の子に飛び移った。

ばさばさと大きな音がして、木の葉がばらばらと散る。

「デイスの奴め、全くなんてえとこに出口を開いてやがる・・・」

彼は太い木の枝の上に立ち、今しがた自分が吐き出されてきた空を見上げた。

早朝の淡い光を放つ鉛色の空に、ぽつかりとそこだけ周りより暗い丸い円が

浮かんでいる。

それらは見る間に小さく縮んでゆき、やがてすべて見えなくなつた。

「いいですかアッシュ。このトンネルは大変不安定で、常に開いておくことは

出来ません。時間が来たらまたこちらから開きますから、遅れないように、

そう何度も開けないと思って下さい。これだけ言ってるのにミス

って

あちらに取り残されたとしても私は知りませんからね」

「でタイムリミットは・・・」

「そうですね。今日は23日、私の計算によると、あちらとこちらの時間差はほぼありませんから、

あちらの時間で25日午前零時、ゲートの出口付近にもう一度トンネルを繋げます。

異界とこちらをつなぐトンネル内の時間の流れの誤差であちらに行くとい日進み

こちらに帰るときには一日遅れるようなので、うまくいけばこちらに24日のうちに

帰ることができるはずです。それと向こうには音素というものがありますから、

譜術は使えませんし、身体能力も著しく劣ります。こちらと同じ感覚でいると

死にますよ」

アッシュの脳裏に出かけるときに交わしたデリストとの会話が思い出された。

「今は計算通りならこちらの時間で24日早朝ということか・・・しかし

帰りはあんな所にゲートを開かれたら、どうすればいいんだ・・・！

まあいい、とにかく手早く用件を済ませよう」

彼は木の幹にしがみつくとすると下にくだった。

地面に足をおろし当たりを見渡すと、ちょっとした茂みの向こうに、

開けた土地があり、さまざまな建物らしきものがあつた。

とりあえずそこへ行き、細かく観察する。

色とりどりの鉄パイプを四角く組んだものをいくつか集めて、さ

らに

大きな四角の塊にしたものの前で、眉間にしわを寄せ、懸命に考えた。

「これはいったい何に使うものなんだ？ 家か？ しかし骨組みだけ

雨ざらしだし、なかは複雑に入り組んでいて、とても人が住めるようではない

あそこには階段があるが上った先は、横に斜めの板が取り付けられているだけだ。」

そうしてさらに視線を先に走らせるとようやくそこに彼にも見覚えのあるものが

あり、これはすべて子供の遊具らしいということがわかった。

アッシュは懐かしさに駆られてその遊具の前に立ち、鎖を手にとると

そつと揺らした。

「ルークもつともつと強く押してくださりませんこと・・・わたしお空の

雲に触れてみたいの・・・」

「ナタリア・ブランコをいくら漕いだって、空になんて手がとどくわけないぞ」

「それでも、いいの・・・もつと高く・・・もつと・・・もつと・・・」

「

無邪気であつた頃の思い出が無人のブランコが揺れるたびアッシュの心に

訪れたが、彼はほほ笑むこともせずに、足早にその場を立ち去つた。

この世界の住人はずいぶん豊かな暮らしをしているらしい・・・

アッシュは、子供用の様々な遊具からそういう印象を持った。

帯剣が違法であることを鑑みてもオールドドラントよりは平和であることがうかがえる。

しかも、さっきまでは土の上だったが、そこから一步出た道は硬く固められ

まっすぐにのび、さらに大きな道へつながっているようだった。

「これだけ固められていれば、雨が降っても、馬車の車輪がぬかるみに

はまることもないな・・・」

彼はその道の真ん中を歩きながら、その硬度を確かめ一人つぶやいた。

そのとき・・・・・・

背後からけたたましい音が近づいてくるのがわかり、振り返ると、何やら

ものすごいスピードで、箱型の物がやってきた。

とっさに道の横に避けると、その箱型のものが自分の目の前にいきなり止まり、

ガラスの窓があいて中から凄惨な形相の人の顔が現れ

「ばっかや~~~~~」

と何か文句らしきものを叫ぶとしたが、アッシュがひと睨みすると

あわてたように窓を閉め、またけたたましい音を立ててあつという間に

彼の前から消え去った。

「あれは何だ？あわてたしいし、うるさい・・・道は真ん中ではなく

端を歩いた方がよさそうだな・・・」

先程のうるさい箱にあっけにとられながらも、彼は先を急いだが背後にまた何かの気配を感じた。

振り返ると、建物の陰に、黒い頭髮の少年らしき人影が、ぱつと

身を隠すのが見えた。

「この世界の子供か？・・・」

知らないふりをして、そのまま歩き、また後ろを振り返ると、その人影はまた身を隠す。

どうやらつけられているらしい。

「出現の瞬間を見られたのか？まああれだけ派手に登場すれば、馬鹿でも気づく・・・。こちらに危害を加える様子はなさそうだ、

放っておいてもいいだろう・・・」

アッシュは、前を向き、もう振り返ることはなかった。

彼はさらに道を急ぎ、今まで歩いてきた道が、大きな幹線道路にあたるところまで

きて、そこを右に曲がった。

自分の横を先ほど見かけた車輪付きのうるさい箱が何台も猛スピードで走る様子に、

おどろき、軒を連ねる商店の目も眩むようなきらびやかなデコレーションと、どこへ行っても

追いかけてくる同じメロディの歌にうんざりした。

道を歩くたくさんの老若男女もどこか忙しげで、異世界から来た変わった服装の

青年に関心を示すこともない

「こちらの世界の祭りとはこういう感じなのか・・・？あの赤い上下の服に白いひげの

扮装はなんだ？道化か？」

こちらの世界は、全てが、信じられないようなスピードでめまぐるしく進んでいる。

アッシュはそういう印象をもった。

彼は調査をいったん切り上げて、頼まれた土産を確保するためにケーキショップへ行く

ことにした。

いったん手にいれてあとは閉店間際まで預けておけばよい
こんなにも早く進んでいるせつかちばかりの世界では、早め早めの
行動が大切だ。

彼は、デイストが書いた地図を頼りに店を探した。

店の場所はすぐにわかった。

パンフレットに書いてある、線の重なりと、看板に書いてあるもの
の

一致しているのを確認してから、アッシュはそこへ近づいていき、
玄関横にうず高く積まれたケーキの箱の前に立った。

そうして、そこにいた若い女に、黙ってパンフレットをつきだし、
ケーキとの交換を求めたが、女の反応は明らかにおかしかった。

「あのう・・・お客様・・・これはご予約表でございます。受取表
を持ってきて

いただけないと、交換はできないことになっております。

こちらの商品は、ご予約分ですので、ケーキをお求めでしたら、

中で販売しているものを

お求めください・・・」

「・・・・・・・・何言ってるかさっぱりわからん・・・」

眉間にしわを寄せ思いつきり当惑顔のアッシュを見て、その売り
子はふるえあがり今にも

泣きそうな顔になった。

「店長・・・・・・・・！店長・・・・・・・・！こちらの外国のお客様に説
明してください・・・」

彼女は、そう言ったかと思うと、アッシュを残したまま、店に駆
け込んで、いくら待っても

出てこなかった。

どうやらこの紙切れでは、ケーキの交換はできないらしいという
ことがうすうすわかり、

彼の眉間のしわはさらに深く刻まれた。

「あんのトカゲ野郎くくくく！この俺にガゼネタつかませやが
って・・・・・・・・」

おもわずぐつと握りしめた拳に何がやわらかいものが触れた。

「ん？」

見ると足元に、先ほどからずっと後を付けてきていた

黒髪の少年が、こぼれそうな笑顔を見せながら、

アッシュの手を握り、顔を見上げているのが目に入った。

「なんだ？この犬つころのような子供は・・・・」

「お兄ちゃんケーキが欲しいなら一緒に来てよ・・・僕は輝久^{てるひさ}
友達はるーくって呼んでるけどね・・・」

「・・・・・・・・？」

言っていることの内容はよくわからなかったが、ルークという音
だけが

耳に響いた。

アッシュは、何かに導かれるようにその少年の後について行った。

#3

アッシュは、ケーキショップに現れた少年と、連れだって歩きながら

先ほど中断した調査の続きを行っていた。

今まで観察してきた情報を基にすると、ここの人々はほとんどが黒髪か、茶色　たまに金髪で自分のような赤い髪はとても珍しい色なのだ

という事がわかってきた。

服装も違うし瞳の色も違いすぎる。

異世界から来た自分がこの住人と違うのは当たり前で目立つこともやむなしと思っていたが、誰からも関心を寄せられることもなく、

自分とどこにでもいるこの少年との取り合わせ自体、一人で歩いていた時より

かなり一目を引くにもかかわらず、誰もが無関心であることが不思議だった。

だが、すれ違う人々が自分と目を合わさないようにして歩いているのを感じとれるようになると、むしろ目立ちすぎることが無視に繋がっていると知り、複雑な気持ちにもなった。

「よそ者にかかわって、厄介事に巻き込まれたくないということか・・・しかし・・・」

アッシュは、大人のそういう態度に比べて、この子供の高すぎるテンションに奇異なものを感じた。

「お兄ちゃん、僕はお兄ちゃんが誰だか知ってるよ・・・僕見たんだ・・・」

何にもないお空からいきなり出てきたでしょ・・・
絵本の中とはずいぶん違うけど、お兄ちゃんはサンタさんなんで

しょ？

夜までばれないように変装しているだよね・・・

その髪の色も、服も今まで見たことがないもん……。そんなに目立ってるのに

誰も、知らないふりしてるなんて変だよね。何か魔法を使ってるんだね。

いいんだ。何にも言わなくても・・・サンタさんだってたまにはミスするよね

そりから落ちることだってあるよきつと・・・

知らないふりしててあげるよ。誰にも言わないから・・・約束するから・・・」

黒髪に黒眼がちの少年は、アッシュにこれ以上ないほどの笑顔をみせて

一人でべらべらとしゃべりまくり不意に立ち止まると小指を立てるしぐさをした。

「約束だよ・・・ン・・・わからないのかなあ？約束の仕方、じゃ握手でいいや・・・」

そう言って小さな手をアッシュに差し出したが、

何の反応も示さないアッシュの態度を見て、勝手にアッシュの手を取り

両手で握り占めると、うれしそうに力いっぱい上下にゆさぶった。年のころなら5〜6歳といったところか、ふつくらとしたほっぺ

たは、

寒さのためにバラ色に染まり、その手はグローブの上からでもわかるほど、

氷のように冷たく冷えきっていた。

かなり長時間外で過ごしていたことがうかがえる。

（こいつは初対面でしかも言葉も通じない相手に何でこんなに愛想がいいんだ？）

「警戒心つてもものが全くないな、お前・・・といっても通じるわ

けないか・・・」

「お礼なんて言わなくていいからね。」

「人を簡単に信じると碌なことないぞ、知らない奴と関わるなど教わらなかつたのか？」

平和で豊かな国の子供は、みんなこんな風に能天気で人なつっこいものなのかと、

少々あきれながらも、しっかりつなされた手を振りほどくことも出来ず、

すっかりこの子供のペースに巻き込まれている自分にアッシュは苦笑した。

「僕の家はケーキ屋さんなんだ。お父さんに頼んだらケーキを貰えるかもしれないよ・・・困った人がいたら助けてあげなさいって言うのが

お父さんの口癖なんだから・・・僕一生懸命頼んでみるね・・・

あ・・・僕のことは、るーくって呼んでよ・・・」

少年はアッシュの瞳をのぞき込み、そういうとまた笑顔をみせた。

「ルーク・・・」

「何？」

アッシュが聞き取れた言葉を繰り返しつつやくと、少年は返事をしながら彼の

顔を見あげた。

「お前ルークっていう名なのか・・・」

ようやくそれがこの少年の名であるらしいとわかって、アッシュは不思議な縁に

驚きの声をあげる。

「そんなに大きな声で呼ばれると恥ずかしいよ・・・みんな見てるし・・・

僕はサンタさんの事なんて呼んだらいいんだろう？だってサンタさんって呼んでたら

みんなが気付いちゃうよ・・・」

るーくという名の少年は周りを見渡しながら、声をひそめた。

「アッシュ」

「あつしゅ？」

「そう・アッシュだ」

るーくはたぶん名前を聞いてきているのだと思ったアッシュは言葉少なに自分の名を名乗った。

アッシュが、るーくに手を引かれて連れて行かれたのは、

最初に訪れたケーキショップから

大きな通りを3本ばかり通り過ぎたところから、少し横道にそれた所にある

小さな商店街の中だった。

幾分古びたアーチ状の屋根が、横並びにずらりと並ぶ小さな店舗を一つにまとめあげ

その真ん中を通る道には色とりどりのタイルで花の形の装飾が施されていたが

所どころ欠けていたり、色褪せていたりして、月日の残酷さを露呈していた。

人通りはそれほど多くなく、どこかしら閑散として、お世辞にもにぎわっているとはいえない。

ぽっかりと空いた入口から3件目にその店はあった。

茶色いレンガを基にした落ち着いた外観で、よく磨がきこまれた大きな

窓ガラスには、赤い服を着た老人の絵が書いてあり、白く塗られた玄関扉には

おそらく店名であるのだろう、見知らぬ文字が刻まれていた。

「ここだよ」

るーくはアッシュの方に向き直り、手を強く引っ張って店の方へと導くようなそぶりを見せたかと思うと、いきなり手を離し、勢いよく店の中に消えていった。

「全く やれやれだ・・・」

アッシュはこのまま、あの子供の前から姿を消しても一向に構わないと

思いつつ、あの笑顔が曇っていく姿が脳裏にちらついてもう少しだけ

付き合ってやることにした。

るーくの後を追い扉を開けると、カランという音がして甘いバナラの香りと

焼き菓子特有の香ばしい香りに包まれたが、

それに似つかわしくない妙にいらいらした男の声も聞くことになった。

「輝久 表から入ってくるなと言っただろう、朝早くから何処へ

行っていたんだ。」

意外な人物が店にいたことになるーくは驚いているようだった

「ごめんなさい・・・おかあさんは？」

「今日雇ったアルバイトくんが事故を起こしてなあ・・・一緒に病院に

いつてるよ。けがは大したことないらしいが、配達分のケーキが全部ダメになってしまって、今から大急ぎで作り直ししないと・・・

みんな忙しいんだから、心配をかけるな・・・」

るーくにそっくりのやや太った男は言うだけ言つと、るーくから眼を離し

今初めて客の存在を知ったかのような愛想笑いを浮かべてアッシュを見た。

「お恥ずかしいところをお見せしましたね、何をお求めですか？」
どうやらこの男はるーくの父親で店の主人らしい。

白い上下の作業服姿は、オールドラントで見るシェフの姿とあまり変わらなかった。

そう広くない店内の大半を占めるショーケースには、数種類の小さなケーキが淡い照明の光に

照らされて行儀よく並んでいる。

「お前客引きだったのか？ 道理で愛想がいいはずだ」

アッシュは自分の間抜けさに、口の端に苦笑いを浮かべながら、
るーくの方を見た。

そして……

その意外な姿に一瞬心を捕らわれた。

彼はさっきのように笑っていた。

一見何の変化もないように見える。

だが目は笑っていなかった。

その大きな黒い瞳からは今にも大粒の涙がこぼれてきそうだった。
「お前」

るーくの冷たい手が自分の子供時代の古傷に触れてじくじくと痛みだす。

アッシュはるーくのその表情から、彼の心情を読み取った。

「客引きをしていたのではなく、家に居場所がなくて外をうろつ
ろしていたのか・・・」

だが俺にはどうしてやることもできん」

彼は、踵を返し店を出るために扉に手をかけた。

4

「待つて・・・」

出て行くそぶりを見せたアッシュを、るーくは必死の形相で引きとめた。

「俺はこの国の通貨を持っていない。客でないものに用はないだろ・・・ましてや

お前の相手をするひまはない」

アッシュは掴まれた腕を振りほどこうとしてまた、るーくの冷たい手に触れた。

彼の心に、ほんの少しの揺らぎが生まれ、ドアノブを持つ手が緩む。

「お父さん」

るーくはアッシュの態度に何かを感じ突然びっくりするような大声を出して、

そこにいる者たちを驚かせた。

「この人はアッシュ・・・アッシュ・ルドルフさんって言って今日外国から来たばかりなんだ。

お金を取られて、すごく困っているんだって・・・

お父さん忙しいんだったら、ちよつとだけ雇ってあげたら？

お父さんいつもいつてるよね・・・困った人を助けてあげなさいって・・・」

アッシュをサンタクロースだと信じて疑わないうるーくは、彼を離したくないあまり

とつさに嘘をついた。

ルドルフというのは、昨日読んだ絵本の中に出てくる赤鼻のトナカイの名前だ。

アッシュの髪を見ていたら、自然に口になっていた。苗字があったほうが

それらしいと思って……

だが、忙しい親にかまってもらえず物語の中で遊ぶことの多い
ーくに

とつて、その言葉は嘘でもなんでもなかった。

「しかしなあ……見ず知らずの人を……」

るーくの言葉に父親は当然困惑顔だった。

しかし、もともと気さくな人柄らしく、少しの思案の後

気を取り直すと、アッシュの方を向き身振り手振りで話し出した。

「なあ あんた 家で本当に働く気があるのか？ 家は今人手が
いくらあっても足りない。 家みたいな小さな店は一回でも信用
をなくしたら

お終いだ。注文のケーキが届かなかつたら、店がつぶれる。

働く気があるなら、奥に来てくれ」

「言葉がわからないというのは不便なものだな」

アッシュはこの親子の会話に、自分の名前が出てきたことだけ聴
きとれたため

注意深く二人の様子を見ていたが、やはり話の内容は見当もつか
ない。

「ちよつと待ってて……絶対に帰っちゃダメだよ」

るーくが突然アッシュの手を離して奥へ駆けて行った。

「あの子供の行動はいつも突拍子もないな……」

アッシュはるーくが次に何をやるのか少し楽しみになってきて、
外へ出ることを

やめその帰りを待った。

息を切らせて戻ってきたるーくの手には紙と鉛筆が握られていた。

「筆談か……」

「私はとにかく仕事場に戻るから、もし手伝ってくれるのならそ
っちへ来てくれ

輝久たのんだぞ」

父親はるーくと入れ違いに奥へ消えていった。

「ごめんね。ケーキ下さいって言えなくなっちゃった。でもお手伝いをすれば

お金がもらえるからそれで買ったらいいよ。僕も手伝うから・・・サント・・・アッシュ日本のお金持っていないよね・・・？」

「ーくの絵の腕前はなかなかのもので、アッシュは二人の話の展開の

おおよその内容を掴むことができた。

「俺にここで働けというんだな、不本意だが目的のためにはしかたがない。

客商売ならこの国の人間の調査もできるだろう」

彼は一度だけーくに頷いて見せた。

アッシュはるーくが用意した白い作業着を身につけると、髪を一つに束ね

それなりの身支度をしてから店の奥へと向かった。

店と同様にあまり広くはないが清潔な空間に大きなオープンが一つでんつと居座って、ひととき強い存在感を醸し出している。置いてある道具のすべてが使い込まれ、よく手入れされていた。店の主人は、自分の仕事に誇りを持っていることが、すぐにうかがえる。

彼はオープン横の作業スペースで、材料の計量をしているところだった。

「ああ来たんだね・・・私のする通りにやってくれるか・・・」

「もつと近くに行った方がいいよ～～～」

「るーくは戸惑っているアッシュの手をとって作業機の横に引っ張って行った。

「おいおい・・・何をするんだ」

店主はとまどうアッシュの目を見て自分の手を見るように合図した。

そうして何度か、同じ手順を見せてもらいそのあと真似して何回か

同じことを繰り返すうち、すっかり作業に慣れてきた。

その手順を大まかに言えば、大量の小麦粉を計りふるいに何度かかけたものを、

卵を割って砂糖をくわえ泡立てたものと一緒にまぜあわせ

バナラエッセンス、バターなどをくわえて生地をつくるということだ。

泡立てたり、混ぜ合わせたりは、機械がやってくれるので、

使い方さえわかれば、もともと器用なアッシュには難なくできた。

それに、ポイントポイントで、るーくが身振り手振りで助けてくれたし重要なところは

店の主人がやるかチェックが入ったので特に問題はなかった

無事にオープンへおさまり、焼きあがりを待つ間にちょうどお昼時になり

るーくの母親も帰ってきて、るーくは彼女に名前を呼ばれさらに

家の奥へ

行ってしまった。

一区切りがついたと思ったアッシュは一人、作業場に面した中庭に出て、

そこにしつらえてあったベンチに腰掛け持ってきていた携帯食料を口に入れた。

単に栄養を取るだけの味気なくパサついた食物をゆっくりと咀嚼しながら、

こんなところで、こんな恰好をして、ケーキ作りの手伝いをして

いるなど 誰も想像がつかないだろうと思うと自分自身が無性に可笑しくなった。

るーくがいくら寂しさを抱えている子供で自身の古傷が痛んだとしても、

両親のもとで過ごせているのだから、そう悲観したこともないし

困っているからと見ず知らずの者を雇うあの父親も思ったほど酷くはない。自分と他人の境遇を比べる趣味は、はなからないが、

あの少年のことが、どうしてもそんなに気になってしまうのか、不思議でならなかった。

「アツシュ・・・お母さんが、こっちに来てご飯と一緒に食べてって言うてるから来て・・・」

るーくがまたこちらにやって来てアツシュの手を引いた。

「いや・・・俺はここがいい」

言葉はわからなくても、こういう時のこういう誘いはだいたいの見当がつく

彼はるーく一家の申し出をかたくなに断った。

るーくはあっさりとおきらめてまた家の中に入って行った。

しつこくからまれないで良かったと思っていたと彼は両手に何かを大事そうに

抱えてもどつて来て、そのうちの一つをアツシュに差しだし、その手に握らせると

自分はアツシュの隣に座りにこにこしながらアツシュを見た

「おいしいよ・・・食べて・・・僕もここで食べるから・・・いただきます~~~~」

そうして大きな口でおにぎりをほおばり、またアツシュに微笑みかけた。

「お前といるとなんだかペースが狂うな・・・」

アツシュは薄い笑みをその口の端に浮かべ、おにぎりを口にしたら少し塩辛いそのおにぎりは、海の味がした。

午後からは、焼きあがったスポンジ生地をさます間に、生クリームを泡立て、

たり、店主がクリームをぬりつけたケーキ台に果物を乗せたりして

何とか、台無しになった分の補充ができた。

「これで俺は解放されるはずだな……」

二度と会うこともない少年に心を捕らわれて、わけのわからない
思いを

するのは、もうおしまいだ……。

アツシユはそう思っていた……が……

「今から配達に行くよ……」これを着て……これをつけて……
るーくはまたきらきらとした眼でアツシユを見つめて赤い上下の
服を差し出してきた。

「これは何だ？」

広げてみてぎょつとした。

「これは、ここに来るまでにさんざん見てきた道化の服だろうが
っ……

これを俺に着るといのか……おい……」

アツシユの眉間のしわが深く刻まれた。

並みの子供なら泣き出すところだ。

「せっかく時間まで変装しているのにつて怒るのもわかるけど……
お母さんがせっかく外国の人がいるんだから、サンタさんをやっ
て貰いたい

つて言うんだもの。配達が遅れたお詫びだつて……

僕は反対したんだけど……でも大丈夫だつて、

今のお兄さんの姿でこの綿のひげつけたら、絶対ばれないよ……

「

るーくは秘密を共有している者同士のようないたずらっぽい笑み
を浮かべた

るーくのその笑みにまたもアツシユの心がぐらぐらと揺らぐ。

「着替えるということは、外に行くということか？」

考えようによっては、誰もが着ているその服の方が目立たないか
もしれないな

作業所では碌な調査もできなかったからな……まあいいだろうそ

れも仕事のうちだ。

全く不本意だがな・・・」

彼はしぶしぶサントクロースの服を着た。

5

「まあ・・・よくお似合いですよ・・・」

赤い上下の服に、眉毛には白い綿　口元は白いつけひげのサンタクロースが

大小合わせて3人、目の前に勢ぞろいしたのを見て、るーくの母親は、

口元に手を当てて、にこりとほえんだ。

目じりがこれ以上ないほど下にさがったその顔は優しそうで、何処となく上品な雰囲気醸し出していた。

「ルドルフさん、すいませんね突然ご迷惑をおかけして・・・でもホントに

綺麗な髪と瞳ですこと・・・つけひげとまゆで顔の大半を隠している

その澄んで力のある翠色の瞳が強調されますわね。無理なお願いを聴いてくださってありがとうございます。」

アッシュの前で何やらごちゃごちゃいいながら笑いかけしゃべりかけてくる姿は

るーくそっくりだった。

「人手がなくて不用心ですから、裏は閉めておきますよ」

「おかあさんいつてきまあ~~~~す」

「もしかして言葉が通じようが通じまいがとにかく話かけるのがこの国の流儀なのか？」

しかしルドルフというのは何だ？」

言葉の端のところどころ繰り返される単語に違和感を覚えつつ、アッシュは

適当にあいずちをうちその場をやり過ごすと、るーくと店主とともに、配達車の前に立った。

「こつちだよ〜乗って・・・」

るーくは後部座席のドアを開けアッシュを中に招きいれると、自分も乗り込み

ボタンとドアを閉じた。

甘いバニラの香りが車内に満ちていた。

窓の外の景色がすると流れ始める。

「今朝俺の横を通りすぎて行っただのは、この世界の馬車のようなもの

だったんだな・・・」

「乗りごこちはそりよりいいと思うよ〜お父さん運転うまいから」

黒目がちの目もとばかりが強調された顔をアッシュに向けながら、彼が小声で

耳打ちすると口の周りのつけひげがアッシュの耳をくすぐり、

アッシュは思わず出てくる笑いをこらえて眉間にしわを寄せ窓の外を見た。

それからるーくは、顔を前に向け運転席に座っている父親としゃべりはじめた。

「お母さん事故の事なんていつてた？」

「うん飛び出した猫をよけた拍子に側溝にタイヤを落し込ませたらしい・・・車が傾いてケーキが

全部下に落ちて・・・おかげで車の中バニラの香りでいっぱいだ。」

「僕この香り好きだよ・・・」

「で運転手はたんこぶ一つだとさ・・・頭を打ってるから検査に時間はかかるし

車には傷がつくし、商品は作り直しだし大赤字だ・・・」

不満声の店主に比べ、るーくは何処となくうれしそうに足をぶらぶらさせていた。

アッシュといっしょに急ぎょ配達について来ることになり、さきほどまで母親と

大騒ぎで赤い服を探していた。

父親とまともにしゃべるのも久々のようだった。

アツシユはその隣で、ただたまつて流れる景色を見ていた。

しばらくすると車は白い壁に囲まれた小さな家の前で止まり、
るーくは車からぴよんと飛び降りてアツシユを手招きした。

「ここのおばあちゃんは耳が不自由だから大きな声でしゃべんな
いと

いけないんだあゝゝ

お金はもう貰っているから、渡すだけでいいからね・・・」

そついいながら、走ってスライド式の木戸を勢いよく開け、
思わず耳をふさぎたくなるような大声を出し家人を呼んだ。

アツシユはあまりの大声にケーキの箱を危うく落とすところだった。
た。

あわててしつかり持ちなおす。

「余分の材料もケーキも、もう無いからな・ここでミスするわけ
にはいかな・・・」

「ごめんくださあゝゝい。ケーキ持つて来たよゝゝゝゝ」

「あらあら・・・待つてましたよ・・・パティスリー・アンソレイ
エの3代目さん」

中から白髪のお婆がニコニコしながら出てきて、るーくの姿を見
るなりさらに笑顔

になったかと思つた瞬間その後ろに控えていたアツシユの顔を見
て口元を

押さえて苦しそうに笑いをこらえた。

「まあ・・・こんなに険しい顔のサンタさんは初めて・・・」

「俺の何がそんなにおかしいんだ・・・？」

「外国の方なのね・・・お仕事大変でしょうけど、頑張つてね・・・
ありがとう」

彼女はケーキを受け取ると代わりに、るーくに小さな包みを渡した。

「ありがとうーおばあちゃん」

思いがけないプレゼントにるーくは笑顔で応え、アッシュと共に車に戻った。

「お父さんお菓子貰ったよ・・・アッシュにもあげるね・・・はいっ」

「あ・・・ああっ・・・」

（こここの国の商売は物々交換なのか・・・？）

道化だから仕方ないとはいえ、俺の何がそんなに可笑しいんだか・・・）

るーくについて行って、ただケーキを渡すだけのことだったが不思議なことがいっぱいだった。

やはり異世界・・・オールドドラントとは勝手が違うのだろうとアッシュは解釈した。

その後もアッシュはるーくに連れられて何軒かの家々を回り、一つ一つケーキを届けて行った。

そっけなく受け取る家もあれば、子供がまわりついて危うくアッシュが切れそうになったりしたこともあったが、

ケーキの箱を黙ってぬつと突き出す仏頂面のサンタに、やけに愛想のいい

ちびサンタのコンビは見ているものの笑いを誘い、随分と周囲をなごませた。

家々で差し入れのお菓子やら飲み物やら果物やらが振る舞われ、そのたびにるーくは満面の笑顔を皆に振り撒いて終始しあわせそうで、

今朝見せた悲しい表情が彼の顔から消えていくのを内心、ほっとしている自分に

気づいたアッシュは口もとに、自嘲めいた笑いを浮かべた。

日が暮れるにつれて、外のイルミネーションがより華やかに輝き出し

人通りが増えていくと、車の渋滞が激しくなり配達は困難をきわめたが

なんとか最後の一軒に配達を終え、三人は店へと戻って行った。

ーくは終始ご機嫌で、今日の戦利品を母親に報告するべく車を止めた裏口から

表へと走りさっていった。

「今日はどうもありがとう。とても助かったよ・・・この時期どうしても

忙しくてなかなかあの子をかまっていられなくてねえ・・・

あんなにうれしそうにしている顔を久々に見たよ。」

ーくの父親は、走り去る彼の後ろ姿を見ながら、アッシュにそう言い、

二人は表へ回って店のドアをくぐった。

「お母さんこれ・・・お客さんからもらったよ」

「まあよかったわね」

表のドアをくぐると、微笑ましい親子の会話が聞こえてきた。

「ルドルフさん・・・これ今日のバイト代です」

ーくの母親はアッシュの姿を見ると即座に茶色い封筒を差し出した。

「ルドルフとは俺のことか？ 何でそんな名になっている？」

アッシュはとりあえず封筒を受け取り、あわただしかった今日の日を思った。

とその時来客を告げる鐘が店内に鳴り響き4人は一斉にドアの方を向いた。

真冬だというのに薄いグレーのトレーナー、ピンクのスカートにサンダル履きの

若い女は、一せいに向けられた視線に驚いて身をすくませた。

亜麻色の長髪は乱れ、小さなつくりの顔にはごまかしようもなく泣いた跡があった。

「あのう・・すいません・・ケーキありますか？　もうどこもお店が閉まっています」

あかりが付いているのここだけで・・」

女は申し訳なさそうに小さな声で言ったが、空っぽのショーケースを見て

悲しそうにうつむいた。

「一つだけありますよ。」

先程まで父親の顔だった男は彼女の顔を見るなり

一瞬で店主にもどり、自ら店の奥に行くこと

一つだけ残しておいたケーキを女に売った。

女の顔が晴れやかになるのと引き換えに、母親の顔には憂いが走り、父親の顔には

苦渋が滲み、るーくの瞳からは、涙が零れ落ちて、アッシュはそのケーキが、

この一家の食べる分であったことを悟った。

「ケーキ屋なんて大嫌いだ」

女が店から出て行ったあとるーくはこらえていた感情を爆発させた。

「健ちゃんちは今日外でお食事するって言ってた。るみちゃんも家で御馳走を

食べてパーティーをするんだって・・でもぼくんちは毎年毎年お父さんも

お母さんも忙しくてそんなこと全然無い。だけどぼくはお父さんのケーキが食べられたらそれで良かった。それだけで良かったのに・

・

ぼく今日頑張ったのに・・」

「家はケーキ屋だからケーキがあつたら売る」

「あなた・・・そんな言い方って・・・」

アッシュはこの一家の騒動を聞きながら、気づかれないようにドアをあけ店の外に出た

「ケーキ屋なんて大嫌いだ」

るーくのつぶやきは、アッシュの耳に届いていた。

言葉が通じなくとも通じる思いはある・・・

異世界だろうが、何だろうが人の思いは何処も同じ・・・

「嘘付きめ・・・作業場でケーキづくりの手順にも詳しく、得意先の

対応もきつちりこなしている奴の言うことか・・・あれほど父親の仕事を感じていたくせに・・・」

アッシュは今、今朝見かけたケーキショップに急いでいた。

るーくが父親以外の作るケーキを喜ぶわけもないとは思いながら、そうせずにはいらなかった。

なぜならアッシュはるーくの泣き顔を見たくはなかったからだ。

鮮血のアッシュと恐れられ、自身が笑うことも、人に笑顔向けられることも

長い間無かった。

それでいいと・・・むしろ笑顔など邪魔なものだと思っていた。

だがここにきて、自分の顔を見て怖がりもせず笑いかけてくる、るーくや

配達先の人々を見るにつけ、それがなんとも心地良く、

自分が今までどれほどそれを、求めていたのか思い知らされた。

たぶん食べた者同士がすべてのしあわせを掴むことができるケーキなぞ、

この異世界にだって存在はしないはずだ。

しかし、ケーキを仲立ちにして、皆が笑顔になることは出来る。

配達先で出会った人々がそれを教えてくれた。

人の好過ぎる店主が女の泣き顔にほだされて売ったケーキで女は
笑顔を

取り戻したが、

そのためにるゝくの一家が犠牲になることはない。

自分はもう笑顔を取り戻すことは無いのだとしても、二度と逢うことも

ないあの少年の笑顔を守ることぐらいは出来るはずだ。

とアッシュは思っていた。

小さな路地を抜けて大通りに出ると、家族連れやカップルでかなりの

人々が楽しそうに笑い合い語り逢いながら道を歩いていた。

その横を縫うように、眉間にしわを寄せたサンタクロースが赤い髪を

なびかせて風のように走り去る。

人々はその姿に燃え盛る赤き焰を見た。

店の玄関は、無愛想な蛇腹状の鉄のシールドで覆われていて暗く硬く閉ざされていた。

「開ける」

アッシュが、あらん限りの力でシールドをガンガンと叩くとものごい音がし始め、蛇腹が生きものの様にブルブルと揺れるさまを

道行く者が振り帰って見たり、何事かと集まり出したギャラリーが遠巻きにして見始めた。

「サンタさんが切れたあ……」

泣いている子供の声も聴こえる。

「ちっ……あまり目立ってもまずいな」

彼はいったん行動をやめ、あたりを見回すと店の横に奥へつづく

狭い通路を発見し、

その場所から光が漏れているのを確認すると、迷わずそこに向かつて

進んで行った。

ひと目を気にする事も無くなって、思いっきり扉をガンガン叩くと

「カチャン」

と音がして中から今朝アッシュの相手をした女が、何事かとぬつと首を

出し、目の前に立っている者の様子をみて驚きに目を丸くした。

「おいケーキを売ってくれ」

アッシュは女の様子を気にも留めず

必死の形相で持っていた茶封筒を突き出した。

「・・・あわわわわわ~~~~~」店長　店長　サント・サント姿の強盗が~~~~」

何を勘違いしたのか女はアッシュをその場に残し店の奥に消えていった。

「おいまさか　また戻ってこないつもりじゃないだろうなあ・・・」

~~~~  
彼はあいていた扉から中に入って人の姿を探し、柱の影からこちらの様子を

眼鏡越しにうかがっている店主を見つけ、茶封筒から札を取り出し彼の目の前に

直接突き出した。

「ケーキが残っているなら売ってくれ。この国の物価のことはよく知らないが

オールドラントとあまり変わらないようなら、一日働いてケーキ一つ買えない

ということはないはずだ。」

「はっはい~~~~」

金の顔を見せられれば、さすがは商売人。

店主はアッシュの目的を正確に読み取り、奥から小さなケーキの箱を

持ってきて、そのふたを開いた。

甘い香りが鼻をくすぐる。

中には白い雪のようなクリームの上に赤いイチゴの乗った

ちいさなショートケーキが一つ入っていた。

「これしか残っていません・・これも、もう廃棄処分になる寸前だったんですよ。これでよろしければ・・」

「かまわない それをくれ」

アッシュはケーキを受け取り、持っていた札を店主に全部渡した。

「おつりを持ってきましたからお待ち下さいね」

店主はびくついた笑いを顔に張り付けたまま、また奥に消えた。

「釣りはいらん・・迷惑料としてとっておけ」

彼は店主の背中に声をかけると、小さな箱を手を持ちる・くのもとへ急いだ。

アッシュが店まで戻ってくると明りの消えた店の前にる・くがぽつんと

座っているのが見えた。

商店街の暗い照明に照らされて、彼の顔は幾分青白く見え、

アッシュが置いて行ったローブとグローブをしっかりと胸に抱き

それに顔をうずめて泣いているようだった。

「おい・・男が簡単に泣くな。」

その声を聴いたる・くは、小さな身をぜんまい仕掛けの人形のように

ぴんと起こし、目の前に立っている者の姿がまちががなくアッシュだと

認めると、ものすごい勢いで彼に近づいて、涙の残るその黒い瞳

のまま

これ以上ない笑顔を彼に向けた。

「ぼくきつと戻ってくるってわかってたよ・・・サンタさん」

るーくは大事そうに抱えていた服を差し出した。

アッシュは、それを受け取りケーキの箱を黙って

るーくに突き出した。

「これ何？開けていい？」

「昼食の礼だ」

ケーキ屋の息子がケーキの箱を知らないはずもない。

その声は期待に満ち、手はふるぶると震えていた。

「イチゴのショートケーキだ。サンタさんありがとう・・・おかあさん・・・」

おとうさん、サンタさんがケーキを持ってきてくれた」

るーくは赤い髪のサンタクロスに背を向けて、大喜びで家に入って行った。

彼はるーくの後ろ姿を見送り、人の全くいない商店街の片隅で赤い上着脱ぎ去ると

ローブをつけグローブをはめた。

顔にはついていたつけひげや、綿を取りズボンを脱ぎ去ると、

きちんと折りたたみ、店の脇のポストの上に置いた。

そうして・・・

「じゃあな・・・」

鮮血のアッシュは店の扉の向こうにいる、るーくに短い別れの言葉を残し

後ろを振り返ることなくその場所から立ち去った。

タイムリミットにはまだずいぶんと間があったが、アッシュは早めに約束の場所に向かっていた。

例のケーキ屋の前には、なぜか先ほどよりも人だかりが出来、天井にクルクルと回る

赤いライトをつけた白黒の車が一台止まっていて、クリスマスのきらびやかな

イルミネーションにまた違った彩を与えていた。

「サンタ姿の強盗が入ったってさ」

「え・・ショートケーキ一個に一万円置いて行っちゃって聞いたけど・・」

「350円のケーキに一万円じゃ店多儲け・・」

「強盗じゃなくねえ？」

「それ サンタのプレゼントじゃねえの？ ははっはっ」

野次馬が口々にする噂話を聞き流しながら足早に通り過ぎ、小さな街頭に照らしだされたその場所についた。

そこは先程の、うるさがが嘘のような静けさに満ちていて、見上げればこの世界の星々が、競い合うように光輝き藍色の空の中に

散らばっている。

しばらく星を見た後で、アッシュは視線を別の方向に移しそこにあつたものに絶句した。

こちらに来たときに初めて観察した鉄パイプの四角い建物の上に明らかに異常な力場がある。

「デイストの野郎・・またあんなところにゲートを開きやがって、

しかも言われていた時間と全くちがう！」

彼は急いで、鉄パイプに足をかけると、一番上までのぼり、その上に立った。

オールドドラントの身体能力なら難なく飛べる高さだが、はたして、この異世界ではどうか？

失敗して下に落ち、打ちどころが悪ければ、確実に死ぬし怪我をしても、もうオールドドラントへ帰ることは出来ない。

ゲートをくぐるには超振動も必要で、こんなに悪い足場でのジャンプ

に加え力の解放もしなければならぬとなればかなり不利だ。ここには音素が存在しない。

体内に蓄えられた力だけで超振動を放つとなればおそらくチャンスは一回きりだろう。

彼はゲートからできるだけ離れた所に立ち、鉄パイプの足場の上を三段跳びの要領で走りぬけ、一番先のパイプを思い切り強く踏みつけると、

その身を中空高く躍らせた

腕を前に突き出し超振動を放つ。

力が虚空に吸い込まれゲートが急即に広がっていったが、飛びこむ前に

みるみるしぼんでいき、消失してしまった。

「くそっ、やはり力が足りないかつ・・・」

アッシュは急激に失速していくその身をどうすることもできず、落ちるに任せるしかなかった。

しかしあわや地面と激突という時に、先ほど消失したゲートが、地面すれすれに

開き、彼はその中に吸い込まれオールドラントへ無事帰還することが出来た。

## #7（前書き）

とにかくキャラ崩れです。

前回のしっとりムードから一転ギャグです。

「で・・・あなたはケーキを持って帰ってきていないというんですね」

やっとの思いで帰ってきたアッシュに、デイストは容赦ない一言を浴びせかけた。

その声には棘があり、どこかヒスリックな響きがある。

「そもそもお前の情報が、ガセだったんじゃないかねえか・・・たとえ本当だったとしても

あんな場所にゲートを開かれたのでは持ち返りは不可能だし原形を留めていない。」

アッシュは昨晚のいきさつをデイストに話して聞かせた。

地面すれすれに開いたゲートにダイブする恰好で、うまい具合に吸い込まれるという事がなければ、確実に死んでいた。

「原型など留めていなくてもいいのですよ。口に入りさえすれば・

・

確かに、パンフレットと引き換えに出来ると言うのは、ささいな訳し間違い

だったかもしれませんが・・・ケーキその物の効果は試してみなければ

わからないではないですか。

一年中食すことの出来るケーキをですよ・・・なぜその日に限って猫も杓子も

求めるんです？何か訳があるはずでしょう・・・

まったく鮮血のアッシュともあろうものが、任務失敗とは焼きが回ったとはこの事ですかねえ」

「なんだと・・・」

アッシュの眉間のしわが一段と深くなった。

予測範囲内の嫌みとはいえ、腹立たしいことには変わらない。

「そもそも今回の任務のメインは異世界の調査であって、ケーキの入手は

あくまで、おまけのようなものではないか・・・ケーキを持って帰らなかった

ことがそれほど重要だとは思えない」

「アリエツタが泣きますよ・・・いいんですか？きつと一生恨まれますよ・・・」

デイストの言葉を聞いてアッシュの脳裏に出かける前に見たアリエツタの

姿が思い浮かんだ。

「みんなさぞかし ガツカリするでしょうね～～」

デイストの嫌みに拍車がかかる。

「よしそこまで言うなら・・・一つ方法がないこともない・・・俺は、異世界でのケーキレシピを入手したし、ケーキの作り方も学んできた。材料はオールドラントと同じものだったぞ・・・だったら

こつちで俺が作ってもいいはずだ・・・文句は言わせない・・・

・  
」

かなり無理やりな話ではあったが、アッシュは、きっぱりとそう言いデイストの研究室を後にした。

それからアッシュは、必要な材料を買い求めたあと、教団の厨房の隅を

借り、作業を始めた。

オラクルの特務師団長とケーキ作りの取り合わせは、あまりにも異質で

皆が昼食の準備をする手をたびたび中断させて、その姿をちらちら盗みていたが、

眉間に思いつきり皺をよせて、卵をかき混ぜたり、ホイップクリームを

泡立てるさまは、鬼気せまっていて、誰しもが引きつった笑いをこらえて

見ないふりをした。

そうして、スポンジ生地が焼きあがり、仕上げの段階になって、イチゴやクリーム等で

繊細にデコレーションされたケーキが出来上がり、

あの鮮血のアッシュに意外な一面があったという印象を皆の心に焼き付け、

しばらくは噂の種に事欠かなかった。

「アッシュ・ケーキ持ってこれなかったです。アリエッタは宝ものあげたのに、楽しみに、楽しみにしてた、です。」

アッシュの顔を見るなり、彼女はその独特な憂いのある瞳で彼を見つめ

ぬいぐるみをぎゅと抱き締めると今にも泣きそうな顔をした。

ここはオラクルの六神将専用作戦司令室。

今、皆の眼の前に置いてある

一つのケーキをめぐって騒動が持ち上がるうとしていた。

「アリエッタ・とりあえずこれは返しておく・・・」

アッシュは出来上がったケーキを、ひとまず部屋の真中にしつらえてある

テーブルに置くと、預かっていた小さな石を彼女の手ににぎらせて、そこに

集まってきた、リグレット、ラルゴ シンク ディストの方を向  
き大きな

声でしゃべりはじめた。

「みんな聴け・・・このケーキは俺が、

異世界のレシピと、作り方で作ったもので、

かの地のオリジナルではなく、いわば質の劣るレプリカ・

デイストの言っている効果が、もしあったとしても、

その結果が十分に得られるかどうかはわからない。

そもそも異世界といえども、そんな都合の良いものなど存在しないというのが

俺の見解だ。それでもいいなら、このケーキを分ける。

希望者は手を上げてくれ。」

「それでも、アリエツタはケーキ欲しいです。」

彼の朗々と響く声に、アリエツタを始めとして5人の人物が手をあげた。

「5人分か・・・切り分け辛いな・・・」

「アツシュお前も入れて6人で分けるといっのはどうだ？」

思案気のアツシュにリグレットが提案したとき、扉がガチャリとあいた。

「そのケーキ私にも分けてもらおうか・・・」

「ヴァン・・・っ・・・ヴァン総長~~~~何故ここに！」

突然の来訪者にリグレットの声が裏返し皆が一斉にリグレットを見る。

「ヴァン総長・・・私の分をおわけ致します」

「いや・・・君の分をもらうわけにはいかんよりグレット・・・おお生クリームのケーキか

私としてはチョコの方が良かったのだが・・・バタークリームも捨てがたいな

チーズケーキとか 定番のブッシュドノエル？ カシス＆フランボワーズ

とかいう変わり種もあったぞ」

「うむ・・・チーズケーキは若い娘に人気があると聞いたぞ」

「そうなのかラルゴ・・・アツシュなせチーズケーキの作り方を覚えて

こなかったのだ？生クリームも悪くはないが、平凡すぎて驚きがないぞ

まあ今となつては仕方がないが……」

（おいっ！俺はケーキ作りの修業に行つたわけじゃねえ  
だいたいなぜヴァンもケーキを欲しがってるんだ！

しかも食う気満々だあこの人は……あのパンフレットを熟知しているっ

そしてラルゴ……この二人の会話はいったい何だっ

「では俺は遠慮する6人で切り分ければ分けやすい」

ヴァンとラルゴの発言に内心動揺しながらも、

アツシュは冷静さを装いナイフを手にした。

「待つて……作つた者が味見をしないっのはどうなんだろうねえ？」

シンクの発言に皆の視線が一斉にアツシュに向けられた。

「おいシンクお前、ホントにケーキが欲しいのか？」

「これだからオリジナルは……」

アツシュ僕だつて六神将のはしくれ……仲間はずれはひどい

なあ・ふふっ」

（お前は俺に嫌がらせをしたいだけだろうがぁぁぁっ）

「では7切れだな」

（分けにくい……）

アツシュの眉間にいらいらによるしわがくつきりときざまれた。

「きつちりですよ……きつちり七等分です。私の取り分が少ない  
なんてことに

なつたら許しませんからね……」

「ううっううっううっうぜえっ~~~~~」

デイストの発言が引き金となり、アツシュはとうとうキレた。

「てめえら……言いたいこと言いやがって……うぜえ……」

もうケーキなんてどうでもいい。碎け散れ絞牙鳴衝斬」

「わああああん……アツシュが切れた、です。」

「落ち着け・・・アツシュ私はこんなことをさせるためにお前に剣を教えた

のではないっ・・・」

「まてメリルの分だけはくれっ」

「ばっかみたい」

「原型はどどまっていなくてもいいですから、消滅はさせないでくださあい」

それそれが勝手なことを言い合って大混乱になってしまったが、

「8つに切れ・・・そしてアツシュは味見用と自分用に2切れ貰え。」

┐

というリグレットの叫びがアツシュに技の発動をとどまらせ  
なんとかその場はおさまった。

アツシュは皆が見守る中で、自作のケーキを口に運んだ。

（うん 我ながらうまい・・・俺にはケーキ作りの才能もあったのか！

しっとりとしたスポンジ生地にかすかにかおる豊潤な

ブランドイの香りと、サンドされたイチゴのみずみずしい香りと  
コラボレーション・・・加えてしつこすぎず、甘すぎない濃厚な  
生クリームとのハーモニーが口の中で一体となって、一つの宇宙を  
形づくっている・・・はあ幸せな気分だ・・・）

「きちんと食べられる味だぞ」

彼が危うく、うっとりとしてしまう所だった自分を戒め、わざと  
ぶっきらぼうにいうと、

7人は切り分けられた一切れのケーキをそれぞれ持って  
部屋を出ていった。

さてそのケーキはその後どうなったか・・・

「ヴァンは異世界のケーキの効果を知っているようだった。

たとえばアツシユが作ったケーキでも私がこのケーキを  
いっしょに食べたいと言ったら、私の気持ちが丸わかりではない  
か・・・

だめだ・・・やっぱりどう考えても手詰まりだ」

リグレットは、ヴァンとケーキを食べる作戦を考えて  
ケーキを眺めて溜息をついているうちに24日が過ぎ、  
ケーキはカビがはえゴミ箱行きとなった。

「ほら・・・これをお食べ」

シンクは迷いこんできた野良犬にケーキを食わせ

「ふふっふ・・・まってなさいジエイド・・・効果が薄いなら、この  
ケーキの

成分を分析して、ふあわあつぷさせてから、一緒に食べましょ  
う！」

デイストは、実験に失敗してケーキを食べられない物にしてしま  
った。

「イオン様・・・もう調べ物は済みましたか？」

「ええアニス。いったん皆んのもとに戻りましょう」

イオンとアニスは、ダアトの図書館の扉をあけて、廊下に出たと  
ころで、

扉の隅に何か黒黒としたものが、皿に乗せられて置いてあるのを  
見つけた。

「何これ・・・うわつきもつ。      ケーキに蟻が、たかっています

よイオン様

何でこんなところに・・・」

「真冬といえどここは、ザレッホ火山の地熱のせいであつたかい  
ですから

蟻も冬眠しないのでしょうか。

おそらく誰かが私のために置いて行ってくれたのですね」

イオンは皿を手にとってそのケーキを観察した。

「だからってこんな所に置かなくなたって・・・」

「私の邪魔をしたくなかったのでしょうか。蟻は食べられますから、ありがたく

いただきますね」

（イオン様あ～～それはシャレですか・・・天然ですか・・・モース様

の悪影響でオヤジギャグが出ているのですかあ・・・）

アニスは心の中で突っ込みをいれつつ、あわててイオンを止めた。

「イオン様～イオン様のお身体は、イオン様だけのものではないんですよお

食べ慣れ無いものを食べて、お腹を壊したらどうするんですう

食べちゃ駄目ですよお」

「ですが・・・せっかく・・・そうですね・私に何かあったらアニスが

困りますからね。心苦しいですが、気持ちだけいただいて

おくことにしますね。ごめんなさい。ありがとうケーキをくれた方」

「ああ腹減ったあ～～～みんないないのかあ？」

外出先から宿に帰ってきたルークは、部屋のテーブルに3切れのショートケーキが置いてあるのを見つけた。

「おお、いいもんあるじゃん。食ってもいいかなあ？ 6人で3個だから

一個の半分は権利があるな。よし先に貰っておこう。」

「ご主人さま～～お行儀が悪いですの・・・ミユウも食べたいですの」

「お前は、ケーキなんて食ったら体に悪いだろ．．草食なんだから．．

動物性脂肪の含まれる生クリームは駄目だってジェイドが言ってたぞ．．

ここは心を鬼にしてだな．．いただきます．．．」

彼はケーキを半分に割り一口で食べてしまった。

「うまっ．．．うますぎっ．．．

しっとりとしたスポンジ生地にかすかにかおる豊潤な

ブランディの香りと、サンドされたイチゴのみずみずしい香りとのコラボレーション．．．加えてしつこすぎず、甘すぎない濃厚な生クリームとのハーモニーが口の中で一体となって、一つの宇宙を形づくっている．．．はあ幸せな気分．．．」

目を閉じ、うっとりとしてこれ以上ないほど満足感いっぱいのは笑顔を見せるルークの横で、ミュウがよだれを垂らしていた。

「なんだよ．．．駄目なんだって．．ホントに．．お前の目の毒だなこれは．．．かわいそうだから、今ここにある分全部俺が食う．．．」

そうしてルークはあっという間に全部のケーキを平らげってしまった。

「ああうまかったなあ．．．」

「ちがうですの．．ご主人さまは自分が全部食べたかっただけですの．．．」

ミュウが涙目で抗議してきた。

「あとで、みんなの分を買って来るときに、お前にも食べられるケーキをちゃんと買ってきてやるから．．．なっ」

ルークがそう言い終わった頃、ガイ ジェイド ナタリア ティアが別室からこちらの部屋にやってきた。

「おおおおおおっおいルークそれ全部一人で食ったのか．．．

」

「あ・・ガイご免・・わるかったな」

部屋に入ってきたガイは中の様子をみて、とたんに青ざめ、顔を手で覆った。

「体何ともないかあ・・腹が痛いとか 腹が痛いとか 腹が痛いとか・・」

「ルークみんなに黙って全部食べてしまっなんてお行儀がわるいですわよ」

「ルーク・・ミウには食べさせて無いでしょうね・・」

「なななんだよ・・ガイ ナタリア ティア・・」

皆の様子が明らかにおかしい

「実はですねティアの所に一切れとナタリアの所に2切れ、それぞれ

別々に3つのケーキのお届ものがあつたのですが、どう見ても手作り感いっぱいの上、もともと一つのケーキを切り分けた様な形跡がみられるのですよ。差出人は不明ですし、異物が混入されでも

していたら、大変なことになりますからね。

今検査の結果がでたところなんですが・・」

ジェイドは顔色の変ったルークを一度見・・ふうっと目をそらした。

「でどうだったんだ？」

ガイは黙り込んでしまったルークの代わりに大声でジェイドに聞き返した。

「残念です」

「いて・・・何か腹が急に・・」

「残念ですよ。普通の何の変哲もないケーキです。いやああ何か毒のものでも含まれていたら面白い事になっていたかなあ・・」

「この鬼畜眼鏡」

いつもの様にしれつというジェイドにルークは、食ってかかった。

「一人で食べておいしかったですか？」

意地汚い悪い子にはちよつとしたお仕置きです」

「誤解だ・・・俺は悪くねえ」

この顛末をちよつと離れたところからルークの目を通して見ている者がいた。

「ヴァンはティアに、ラルゴはナタリアにそれぞれケーキを送っていた

のか・・・一緒に食べることはなくても、気持ちだけは送ったかったというわけだな・・・

それを、あの屑レプリカは一人で全部食っちゃいやがった。

全く幸せそうな顔しやがって・・・ガキが・・・」

アッシュは、自分がナタリアに送ったケーキを、送り主の名を明かさぬまま、ルークが食べないようにする事などいくらでもできた。

なぜ止めなかったのか自分でもわからなかったぐらいだ。

それよりも、ケーキぐらいで喜んで、しあわせだと笑っているルークの顔を

鏡越しに見て、

たまにはそんな日があってもいいとすこし思った自分の変化に心底驚いていた。

「デイストのあの話は、全くの出たらめではなかったかもしれないな」

彼は口の端にいつもの薄い笑いを浮かべて

その場から立ち去っていった。

FIN

## #7（後書き）

読んでくださってありがとうございました。

ゲーム中ではこの時期にはイオン様もアリエッタもいませんが・・・  
ほんとこんなことやってる場合ではないんですけど・・・  
幸薄いアリエッタにちょっとだけ幸せ感をあげたかったです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0130j/>

---

アッシュのクリスマス

2010年10月21日22時41分発行